

仙川教会代務者(ユーカリが丘教会牧師) 大串 眞

2022 年度、コロナ禍の中でしたが、ユーカリが丘教会の祈祷会で読み続けてきた聖書があります。それは、ローマの信徒への手紙でした。みなさんは、「ローマ書」(省略してこういしましょう)ローマ書は、教会で聖書研究会などで学んでみて、また説教で聴いてみて、どういう印象を持たれたのでしょうか。「難しい」とか、「固い」とか、そういう印象が多かったように思います。確かに、難しいのです。聖書を理解する上で、特に、牧師が学ぶ上で、注解書という本を読むわけですが、このローマ書を注解書で読んで、それを忠実に、信徒の方に説明しようとするとうどういうことか、ちんぷんかんんになってしまいます。

これについては、わたしは大変苦い思い出があります。神学校最終学年の時に、御殿場の駿河療養所という国立のハンセン病の療養所があるのですが、その山の頂上に、神山教会という教会があるのですが、そこに行って、説教を担当したのです。その時したのが、ローマ書1章のこのところでした。自分としては、一生懸命準備して、これぞと思うような原稿を作ったのですが、礼拝がなんとなくシラーとしていました。そして、奉仕が終わって、ハンセン病の患者さんとして、その療養所で長く生活をしていた方が、車を運転して、電車の駅まで連れて行ってくれました。その車中だったかと思います。富士山を眺めながら、御自身がハンセン病となって苦勞してきた話を少し話された上で、この日の説教について語ってくださいました。わたしのような者に、わかるように、届くように、話してくださいということ。その日の説教は確か、「神の力」というような題で、わたしはその説教で、神の力という意味を注解書の知識で塗り固めたようなハリボテのような説教だったのです。しかし、本当に力ある説教、力ある御言葉というのは、そういう机の上で調べて、組み立てたような言葉でなくて、目の前の生きることを苦勞しながらも、生き抜いてこられた方にとって、まことに生かされるような御言葉、それが、生きた説教であり、使徒パウロがここで言う、福音ということばなんだと思います。

そんなローマ書について、何度も何度も痛い目にあってきた、破れてきた、そんな過去があるのですが、しかし、あえて、この時期に読んでみようという思いに至りました。実は、牧師として、この春で、37 年歩んできたことになりましたが、教会の礼拝において、連続講解として、取り上げるのは、実は、はじめてであります。それまでは過去のトラウマに捕らわれていて、恐ろしくて取り組めなかったのです。しかし、なぜか、今回ローマ書を取り上げました。実は、ローマ書は、時代の転換期に読まれてきたと言われています。宗教改革の時代に、マルチン・ルターによって導かれました。ローマ書が大きな影響を与えました。また近代から現代にかけて転換期の時、カール・バルトが出版したローマ書注解によって、ローマ書は読まれました。時代の転換期において、教会が本来の聖書に立ち帰ろうとしたときに、そして、それは、わたしたちの生き方として、何が一番大切なのかを確認する時に、また、何によって、本来のあるべき姿に立つかという時に、このローマ書は読まれてきました。去年は、祈祷会で取り上げましたが、なんかこう、骨を感じました。骨の部分をもう一度、組み立て直しているような感じでした。教会が新しい時代を歩み始めようとするときにローマ書から聞くことを促されたのです。

さあ、1:1~この手紙をローマに書き送った使徒パウロの思いがつつられているのですが、その中で、一番、わたしの心に刺さってきたのは、「果たすべき責任」があるといっているこ

とです。少し前から読みますと、14節「わたしは、ギリシア人にも、未開の人にも、知恵ある人にもない人にも果たすべき責任があります。それで、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を告げ知らせたいのです。」1節から読んでみるとほとんど初対面のローマにある教会の人々に向かって、使徒パウロは、丁寧に自己紹介をし、執筆に至った動機について触れ、祝福の挨拶からはじまっています。そしてローマに行きたかったけど赴く前にこの手紙を書いていることが述べられています。それは、ローマが世界の中心だからです。その教会が強められることで、ローマから、世界に向けて、地の果てまで福音が広がってほしい、そう願って、この手紙を書き送っているのです。最初は丁寧に語っています。しかし、途中で調子が変わってきます。内に秘められた熱い思いが、地下からマグマが噴き出るように噴き出る瞬間がある。それが、この「果たすべき責任」と口にした瞬間から噴き出たのです。そこからワーと伝道者の熱い思いが噴き出ている。それは、パウロが自分で造り出したことではないのです。パウロ自身が与えられ、生かされたことです。パウロ自身、火がついて止まらなくて、内側から燃やされて、それを押しとどめておくことのできないこと、それが、ここでいう福音なのです。福音からくる聖霊の炎。それがここにあることです。

16節「わたしは福音を恥じとしない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。」ここで力ということばが出てきます。これは、先ほど、わたし自身の苦い経験、トラウマのようなこととして話しました。これは、説明ではどうすることもできない。だから、わたしも説明しません。むしろ、言葉の勢い、響きから感じとっていただきたいのです。それは、内側から霊的に燃やされている証しがあるからです。パウロ自身が、霊に燃えている。福音が内側からメラメラと燃えている。だから、それを言葉で表そうとすると、こうなるのです。

ここで、福音とは何か、一応言葉で説明されています。「福音には、神の義が啓示されていますが、それははじめから終わりまで、信仰を通して実現されるのです。」

さあ、これをなんと語るか。これをわたしの言葉で語るとすれば、十字架の福音であります。それは、罪のゆるしをもたらすという意味が第一の意味であります。第二の意味があります。それは、十字架の主と共に、自分が死ぬという意味です。そして第三の意味は、自分の十字架を主と共に背負うということです。

罪のゆるしが与えられ、自分が死に、そして、自分の十字架を背負う。ゆるしが与えられるということは、どうやらわたしにとって良い事らしいぞ、それは救いっポイということはわかるような気がします。しかし、第二の自分が死ぬということや、十字架を背負うということは、なんだか、救いとはほど遠いような、むしろ、自分にとっては辛いことのような、試練のような響きがあります。そうなのです。

皆さん、人生の試練、困難、行き詰まり。そういうことがあればあるほど、十字架が身近なことになり、わたしの救いであることが分かってきます。

かつて、青年の頃、教会でこんな歌が流行っていました。いや、これは踊りですね。

「十字架、十字架、わが力、わが力、わが力、十字架、十字架わが力、グローリハレルヤー、十字架、十字架わが命、わが命、十字架十字架、わが命、グローリハレルヤー」
十字架十字架わが救いわが救い、十字架十字架わが救いグローリハレルヤー、」

十字架は、ある意味自分のどん底を見つめることです。だからゆるしは生きることになります。十字架は、自分から離れ、死ぬことになります。死んでそこから新しい命、永遠の命がは

じまっています。そこには聖霊によってのみ与えられる聖なる道のりがあります。主と共に十字架を背負う。それは、苦難を主と共に背負うことです。教会という歩みの中に自分の身を置くことです。そこには、細くて狭い、いのちの道が備えられています。

2つ証しを語ります。

わたしにとって一番の十字架の経験。それは、開拓伝道時代、本当に行き詰ってしまったことです。

高知県の開拓伝道でも行き詰まりの経験はもちろんあります。それはまず教会の歩みとしてよりも、牧師の家族として、個人として、行き詰ってしまったことがありました。病気ということもありました。不登校という問題もありました。夫婦として、親子としてどうにもこうにも疲れてしまって、その教会の現場を離れることまで考えました。妻の実家が、岡山県だったので、岡山大で一旦休職して、いろんなことが整うまで現場を離れようとしていたときがありました。しかし、そのような弱さの極みのような時に、ある牧師夫妻が訪ねて来てくださったのです。一緒にご飯を食べ、何気ない会話をして過ごしました。内面では、この地を離れようとしていたのですが、そのことを打ち明けられずに楽しい会話をしました。そしてそのご夫婦は帰っていかれました。その男性の方が、当時は牧師をして、お連れ合いは、その時、牧師夫人でした。後で、逆転して、女性が牧師、お連れ合いの男性は、一信徒となられました。その夫妻は、躁鬱病や、アルコール中毒という病を抱えておられました。しかし、明るかったのです。突き抜けた明るさがありました。そのお姿を通して、御言葉がわたしたちに示されました。「わたしの恵みはあなたに対して十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮される。」(Ⅱコリント 12:9)パウロの言葉が迫ってきました。それで、離れずにとどまり続けたのです。支えられ続けたのです。

もう一つのことは、今度は千葉県の開拓伝道時代です。高知県の開拓伝道でさんざん苦労したのに、よせばいいのに、また、千葉県に渡ってきて開拓伝道に従事しました。そして、また、どん底を経験することになります。今度は教会の行き詰まりです。教会が新しく動き出すときに、人間的なもの、罪がまた動きはじめます。サタンが働くと言ってよいでしょう。そんな中で時に疲れ果ててしまうこともあります。会堂が建つまでになんども場所を移転しながら、人間的な愚かさ、罪が現れました。恥をさらし、悲しみの日々がありました。

ある時、会堂建築中に、300万円の損失を作ってしまいました。その後、その責任問題を問われる場面がありました。もう牧師として歩めない。辞任をしようかという瀬戸際に立たされるときがありました。しかし、そんな苦境に陥った時に、気が付いてみると、側らに主が寄り添っておられました。十字架の主です。主はおっしゃる。「わたしはあなたを赦す。」「わたしはあなたと共に歩む。」「わたしは決してあなたを見捨てない。」と仰る。そして、主は「十字架を背負って一緒について来なさい」と促されるのです。従っていくでしょう。すると、道が拓かれるのです。いつのまにか荷は軽くなり、新しい命に満たされ、教会が建ちあがっていくのです。最後はハレルヤの賛美だけが残ります。こんな試練を潜り抜けることを通して、わたしは伝道者として語る言葉をこの口に与えられたと思いました。福音の言葉です。わたしたちを本当の意味で生かす。わたしたちの教会を、立ち上がらせる。十字架の福音。わたしたちに十字架がある。十字架の主が、わたしたちを根底から支えられる。その福音こそが、わたしたちを建てる。教会を新しく出発させる。わたしたちを活かすまことの力です。これをわたしは黙っておくことができない。地の果てまで福音を宣教する、果たすべき責任があるのです。こ

これから共に歩みはじめたい。祈りましょう。